

学報

スポーツ文化の風を発信する

NITTAIDAI

38

2014.Summer

巻頭 学長エッセイ「獅子吼しよう! “いのちの尊厳”を!」—— 1

いま、なぜ保健医療学部か —— 2

特集■保健医療学部 整復医療学科／救急医療学科 —— 3

平成27年度入試制度 —— 9

「体育科学をリードする」 ～大学院・研究科の取り組み～ —— 11

クラブ情報●2014年度上半期クラブの主な大会成績 —— 13

NEWS●2014年度上半期ニュース —— 14

INFORMATION●国際交流センターがスタート!



日体大新宣言



次代のために

保健医療学部 スタート

20年後、30年後の将来はどうなっているだろう。

少子高齢化や人口減少の問題が、マスコミでもたびたび取り上げられている。国立社会保障・人口問題研究所の推計によれば、2030年には人口が約1千万人減少するという。

若い今だからこそ、「命」や「生きる」ということにについて真剣に考えたい。ほかでもない、将来を担うのは自分たちなのだから。

今春、保健医療学部がスタートした。

これまでの体育・スポーツの教育・研究成果を基盤に、社会的ニーズが高まる医療分野へのさらなる展開が期待される。倫理観・使命感といった日体生が伝統的に持つ強みも、医療や救急の現場で大いに発揮されるに違いない。

2020年には東京オリンピック・パラリンピックが開催される。前回の東京大会（1964年）とは、また違った意味を持つ大会となるだろう。成長から持

続可能な社会へ、国際平和へ、一人ひとりでできることは何かを考え、それぞれのやり方で貢献して欲しいと思う。

スポーツを愛する日体生が中心となって輝ける未来を築いていくことを期待する。



日本体育大学
日本体育大学女子短期大学部
学長 谷釜了正
たにがまりようしょう

学長エッセイ

獅子吼しよう！

“いのちの尊厳”を！

本学は創立以来123年にわたり体育及びスポーツの学問分野において“元氣な澁刺としたいのち”を輝かせるための教育・研究・社会貢献を行ってきた。本年4月から新しい試みとして保健医療学部をスタートさせて、“傷つきたいのち”や“消えようとするいのち”の“元氣”を回復させるための教育・研究・社会貢献に取り組み、有意な人材を社会に送り出していきます。

わが国はいま、かつて経験したことのない高齢社会を迎えています。これは“元氣を失いつつあるいのち”が増えてきていることを意味しています。健康寿命を延ばすためのスポーツの奨励・促進はもちろんのこと、“衰えつつあるいのち”に向き合い、医療的知識と技術を通してその“いのち”を“快氣”へと向かわせることがいまほど求められているときはありません。本学から社会へ向かつて“いのちの尊厳”を高らかに獅子吼しようではありませんか。

いま、なぜ保健医療学部か

2013年度の「児童スポーツ教育学部」開設に続き、2014年度には「保健医療学部」がスタートしました。本学がなにを目指し、どのように社会貢献をしようとしているのか？ その方向性や背景を、共有しておきたいと思います。

●高まるスポーツ、健康への期待

2011年8月に施行された「スポーツ基本法」の本文は「スポーツは世界共通の人類の文化である」という言葉から始まります。さらに、基本理念では、スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは全ての人々の権利であるとし、スポーツは、青少年の健全育成や、地域社会の再生、心身の健康の増進、社会・経済の活力の創造、我が国の国際的地位の向上等国民生活において多面にわたる役割を担うとされています。本学の教育体制や施策が、この概念に合致するものであることは、これまでも、そして将来も変わりません。

平均余命が80歳前後に達する高齢化社会において、人々のスポーツや健康への関心は、いっそう高まりを見せています。同時に、年齢や健康状態等によって、スポーツの目的や参加スタイル、安全・健康への対応など、人々が求めることはさまざまです。本学はこうした社会的要請に応え、新学部開設をはじめとする教育体制の充実を図っています。

●保健医療学部が目指すこと

本学は、貫して、心身の健康を育み、その向上を教育目標としてきました。世界的に優れた競技者や指導者を多数輩出してきたことは周知の通りです。一方、少子高齢化の顕著な進行により、社会構造が大きく変化しつつあります。高齢者の増加は、言い換えれば、心身の健康に不安を抱える人の増加を意味します。こうした人々への支援を目指し、医療分野の一端で社会貢献を果たすために、保健医療学部を開設しました。

保健医療学部では、柔道整復師、救急救命士として必要な国家資格、知識と技能の習得を目指すことはもちろん、これからの時代を担う社会人・国際人としての素養の育成にも力を入れます。例えば、柔道整復は我が国古来の治療法であり、これをいかに科学的根拠に基づいた医学に発展させていくかという点が課題の一つです。また、救急救命においては、まだ新しい分野であり諸外国に比べると立ち遅れている点があることも否めません。こうした使命に果敢に挑み、学び・貢献し続けることのできる人材を育成したいと考えます。

●日体大だからできること

本学は、体育・スポーツの科学的研究をもとに、競技力の向上や豊かな社会の実現に向けて多様な教育・研究（「実践」と「理論」）を展開してきました。こうした知見が医療分野の学修において活かされることは言うまでもありません。また、スポーツで培った忍耐力や精神力、協調性、使命感等は、医療・救急救命の現場では欠くべからざる素質と言えるでしょう。社会的評価も高く、柔道整復師やトレーナーとして、消防官・警察官・自衛官などの公安職や行政職の公務員として、多くのOB・OGが活躍しています。

さらに、2014年度から「日本体育大学社会貢献推進機構」を立ち上げ、社会貢献事業を二層推進する体制が整いました。スポーツを「する」「見る」「支える（育てる）」取り組みにおいて、自治体や学校等と連携しながら、さまざまな活動を展開していきます。こうした地域・社会の中で学ぶ経験も、将来の活躍で発揮できるはず

●学生に期待すること

やりたいスポーツに存分に取り組み結果を出す。学びたいテーマを極める。まずは、それぞれの目標に向かって邁進してほしいと思います。そして、将来、未来社会のことを考え、さらに広い視野から自分になにができるかということを追求してください。

東日本大震災から3年半が過ぎました。ここで、私たちは「命」や「絆」の大切さをあらためて噛み締めました。課題が多いほど、逆に皆さんの活躍の場も広がっていると言えるのではないのでしょうか。

震災において諸外国から物資や医療・救助要員の支援を受けたり、あるいはトレーナーとして海外チームに所属したり、国際対策に帯同したり、いまや人々の交流や活動の場は世界に広がっています。こうしたグローバルな人材を育成することも、保健医療学部はもちろん、本学のすべての教育の使命です。スポーツを軸に、そこで学んだ知識や経験を活かすことができる人材に期待が高まっています。

体育・スポーツを軸に、多面的に未来社会に貢献していく



保健医療学部学びと活躍のフィールド

展開。少子高齢化、国際化社会において、人々の QOL (Quality of Life) の向上に貢献できる国家資格をそなえたプロフェッショナルを育成します。



整復医療学科

柔道整復師とは？

□ 柔道整復師とは「厚生労働大臣の免許を受けて、柔道整復を業とする者」。医師以外で職業として医療（整復術）を行えるのは柔道整復師だけです。

□ 患者さんに医療を施すのはもちろん、スポーツ現場でのコンディショニングコーチやメデイカルコーチとして、トップアスリートのサポート等も行います。

□ 地域のスポーツクラブや学校のスポーツトレーナー等として、地域医療への貢献や高齢者に対する健康指導・支援を行う分野での活躍も期待されます。

学科の特徴

・そもそも柔道整復とは？

□ 古くから、整骨、正骨、あるいは接骨やほねづぎという名称で受け継がれてきた日本固有の治療法です。人間が本来持っている自然治癒力を生かして、骨折、脱臼、捻挫などを快癒に導く技術が特色とします。

・整復医療学科の特徴とは？

□ 「現代医療に立脚した整復」という新しい概念に基づき、伝統的な技法を継承するだけでなく、EBM (Evidence-based-medicine=科学的根拠に基づく医学) に発展させることを目指します。

□ 少子高齢化の進行にともない、アンチエイジングや予防医学など、健康増進へのニーズや社会意識の向上に対応できる人材を育成します。

□ 柔道整復分野の指導者や国際的に柔道整復をアピールできる、英語コミュニケーション能力を備えた人材を育成します。

学ぶこと

□ 医療倫理や医療コミュニケーション

□ スポーツや日常生活におけるけがの応急手当と柔道整復治療法

□ スポーツ障害の予防とコンディショニング

□ 整形外科学、救急医学などの現代医療

□ メデイカルリハビリテーションとアスレチックリハビリテーション

取得可能な資格

□ 柔道整復師国家試験受験資格

将来

□ 整骨院・接骨院の開業

□ 医療機関への就職

□ 大学院等での研究活動

□ スポーツ業界への就職

□ 福祉関連産業での活躍

ほか

日体柔整専門学校の実績を融合

体力と健康の増進を教育してきた日体大のこれまでの実績と日体柔整専門学校での柔道整復師養成のための専門教育の実績を融合させ、現代医学に立脚した柔道整復の学問的構築による体力及び健康増進への寄与、柔道整復のスポーツ外傷・障害への適応、さらにスポーツを通じた高齢社会での健康維持・増進などの負託に応えていきます。また身近にトップアスリートがいるのも日体大で学ぶことの特権です。



メッセージ

整復医療学科の創設により、これまで健康や医療において日体大では予防までしか学べなかったものが、治療の分野に入っていけることになります。「整復」と「医療」が掛け合わされることによって、ケガの最初から最後まで関わり学ぶことができるわけです。学内にさまざまなトップアスリートがいることも強みになるでしょう。ケガの予防、治療、そしてリハビリまでの現場に立会い、その現場を学べる環境があることは特筆すべきことです。

救急医療学科

救急救命士とは？

- 救急救命士は、1991年（平成3）年に誕生した比較的新しい国家資格。一刻を争う救急の現場で、医師の指示のもとに救急救命処置を行います。
- 救急の現場に出勤し、救急救命処置を実施できる唯一のコメディカル（医師以外の医療従事者）です。
- 消防機関の救急隊員や医療機関をはじめ、警察署等の地方公共団体など幅広い分野を指すことができます。救急救命士のニーズは高まっており、資格取得者の活躍の場はさらに広がることが期待されています。

学科の特徴

・救急医療のニーズは？

- 救急医療はこれからの分野であり、従事者・研究者・指導者の育成が急がれています。
- 救急救命士国家資格取得者の後続教育や生涯教育を提供することや、救急医療の学問体系を確立することも救急医療学科の使命です。

・救急医療学科の特徴とは？

- 医療従事者として必要な医学知識に加え、救急救命に関する法的知識や科学的考察力・分析力を習得。プレゼンテーション能力や患者とのコミュニケーション能力なども養い、総合的な医療人の育成を目指します。
- 災害医学や救急車同乗実習などを導入。専門知識・技術を習得するとともに、精神的・心理的アプローチや地域住民との関わりなども学びます。

学ぶこと

- 高度救命処置技術
- 救急医療体制の整備とメディカルコントロール
- 救急法学や救急倫理などのバイオエシックス
- 救急医学コミュニケーション
- 病院前救急医療の体制化と効率化システム化について学修および研究など

取得可能な資格

- 救急救命士国家資格受験資格
- 第一種衛生管理者

将来

- 医療現場・医療施設での活躍
- 駅や空港、学校、企業などさまざまな施設において救命士として活躍
- 大学や医療機関で研究を続け、現場で指導できる人材として活躍
- 国際貢献できる人材として海外で活躍

日体生の社会貢献活動に期待

東日本大震災支援においては、日体生や教員が復興支援活動や授業補助等に取り組んだ。岩手・宮城・福島を巡った日体大スポーツキャラバンでは、訪問した各地で好評を頂いた。また、キャンパス周辺においても世田谷区・横浜市と連携したさまざまな活動を行っている。今年「日本体育大学社会貢献推進機構」が発足し、さらなる組織的な展開が可能となった。社会に出るための学びの場として、諸活動への多くの学生の参加が期待される。



平成24年10月 日体大スポーツキャラバン



「もしも私に何かできたら」。そんな思いを持ったことがある人もいるでしょう。欧米では日本以上に、救命士の判断で多くの種類の医薬品の使用や医療行為ができます。災害や事故、事件などの危機的状況において、被害者の命が助かるかどうかは救命士にかかっています。これはすなわち、日本でも今後必ず救急救命士の需要が拡大し、活躍の場が広がるということです。日体大の伝統や歴史、ブランド力も大きな強みとなるはずです。

新学部がリードして 柔道整復師の可能性を広げたい。

幅広いスポーツを支える 柔道整復に



伊藤 譲 教授
(整復医療学科)

■プロフィール／伊藤 譲 (いとう ゆずる)
保健医療学部整復医療学科教授。1969年大阪府生まれ。大阪医科大学大学院医学研究科(博士課程)機能系生理学分野修了。博士(医学)。高校時代に流行っていたアニメ『北斗の拳』の影響を受けて、鍼灸師の道を志す。のちに、柔道整復師の夜間の専門学校に通いながら、昼間は病院勤務を続け、31歳で柔道整復師の資格を取得した。趣味はサイクリング。座右の銘は宮本武蔵の『我、神仏を導んで神仏を待たず』。

目的意識の高い日体生に期待

日体大の学生さんと接していると、目の輝きが明確に違います。スポーツをする中で、自分の経験がある学生がもともと多いですから、自身の実体験をもとに、医療でスポーツに貢献できることも理解しているのでしょう。柔道整復師になりたいというしっかりとしたゴールを設定して入学してきているので、目的意識も高いです。

私自身、若い学生さんたちと話せて、毎年100人単位の新しい学生さんと知り合う機会を得たことをとても嬉しく思っています。彼ら、彼女らが将来活躍するのを見るのが楽しみです。かつては私も学生たちとバーベキューをしたり、朝まで勉強会を開いて実験をやったりしてきました。教員と学生の距離が近いのが日体大の魅力でしょう。さらに他学部の学生とも交流するなど、医療に携わる者に不可欠な人との絆を大事にしてほしいと思います。

した時点で柔道整復師が駆け付けてそこで治療をする。現場で起こったけがに対しての処置が早ければ早いほど、治るまで時間はかかりません。柔道整復師がスポーツのことをよく理解して、その現場にいることは大きな意味があると思います。日体大のようなトップアスリートが揃っている環境で、柔道整復師がしっかりと付いて選手のケアをすることにより、けがの治療や競技力向上に成果を発揮すれば、世間に柔道整復師が認められて、その存在感も高まります。

そうならば一般のスポーツ愛好家にも接骨院をもっと有効活用してもらえようようになるでしょう。柔道整復の評価を高めることも学部の使命なので、社会に響くような実績を一つひとつ積み重ねていきたいと思えます。整復医療学科は、そういう夢やチャンスを負っている、と信じています。

恩師の言葉。 「患者さんを自分の親と思え」

学生に伝えたいことは「謙虚であること」。そ

れだけです。私自身、調子に乗っていると、頭をトンカチで打たれるようなタイプなので、挫折の経験はたくさんあります(笑)。自分ができると思っていると不思議とミスをするもので、患者さんのためを思っていない、自分の中に驕りがあっては結果的に患者さんに不利益を与えることになってしまいます。患者さんの気持ちになれば、痛みを取ってほしい、治してほしいという結果が重要です。そこに最短距離で行かないと認めてはもらえません。自分の気持ちやエゴで治療をするのではなく、患者さんにとつてのベストを目指して、患者さんが望んでいる治療法を提供すること。そのためには相手のことを考えないといけないのです。

恩師に言われたことは、患者さんを自分の親と思いなさいということ。自分の親や兄弟、子供が患者さんだったらどうするのか。身内と置き換えて考えれば、必ずベストの答えは出ると言われたことが印象に残っています。学生が私のところに相談に来ると、自分の子供と重なります。学生と話すときも、自分の子供と、思っているように心がけています。それが私の指導におけるモットーです。

仕事の魅力、新学部にかける思い

先生方の経験が証明しています。どのような思いで現場に携わってきたか、

日体大に赴任してきた当初は、キャンパスの中で普通に五輪代表選手を見かけたり、ドキドキすることはありでした(笑)。柔道整復は、スポーツとも密接な関係がありますから、日体大に整復医療学科ができたことに大きな可能性を感じています。スポーツの現場で柔道整復師が貢献できる場は必ずありますし、活躍の可能性をもっと広げていきたいと考えています。来年夏頃を目前に日体大附属の臨床実習施設として当初の計画よりも規模を拡大し、内容もさらに充実させた接骨院を開院します。実習を受ける学生さん達は、ここでしか得られない貴重な経験ができるでしょう。近い将来、医療でスポーツを支える、柔道整復でスポーツを支えるメッカとして機能することになるでしょう。

これまでもドクターやトレーナーがアスリートのけがの治療に取り組んできましたが、柔道整復師ならさらに踏み込んだけがの治療ができます。例えば、試合中にけがが発生

アスリートを支える柔道整復。人々の安心を支える救急医療。その仕事の重要性は日体生に何を伝えたいのか。学科長を務めるお二人の先生にお話を聞きました。

救急医療の仕事にゴールはない。
それがやりがい。

天皇・皇后両陛下から
かけられた労いの言葉

私が緊急医療援助の仕事をする中で、最も印象に残っていることは、数々の途上国緊急医療援助を終えたあと、天皇・皇后両陛下から数回にわたり、労いのお言葉をいただいたことです。緊急医療援助を始めた入り口は、JICA（独立行政法人国際協力機構）の国際緊急援助隊の医療チームで、地震や津波など、自然災害直後の被災民の救済に携わったことです。中米のニカラグア、東南アジアのフィリピン、アフリカのアルジェリア、最近ではインドネシアのニアス島などで援助活動をしてきました。



WHO（世界保健機関）に移ってから、途上国の保健医療改善に従事し、中国やアジアの西太平洋諸国など10カ国ほどを回ってきました。

この仕事のやりがいは、ゴールがないこと。世界の保健衛生状態は解決しないといけない問題が多々あります。中でも途上国は深刻です。アジア太平洋地域ではポリオ（急性灰白髄炎。ポリオウイルスによって発症するウイルス感染症）がなくなったとは言われていますが、イランやシリアなど紛争地域にはまだまだポリオが蔓延しています。われわれは島国で、あまり他国・地域の影響がないようなところで暮らしていますが、世界の情勢は日に日に刻一

刻と変わっているのです。未知のウイルスや未知なる病気がいつ表れるか分からない。そんな中でわれわれは暮らしていることを忘れてはいけません。

“知識は力”。
それが適切な判断の礎に

私が教壇に立つのは、2001年から2005年までWHOで働いたあとに、母校の弘前大学で公衆衛生を教えて以来です。これまで、救急医療の臨床だけでなく責任を全うすることに専念してきましたが、臨床から教職へガラッと立場は変わりました。一つひとつの授業が88名の人生を動かすこともあり、そう思うと身が引き締まり、授業の準備に心を砕いています。

学生たちと日々向き合う中で、私が口酸っぱく話しているのは、知識は力になるということです。筋肉を鍛えて、1秒でも速く走ろう、少しでも高く跳ぼうとトレーニングをしているアスリートたちと同じように、人の命に関する知識を一つでも多く身に付けることが重要なことです。将来どんな分野に進もうとも、救急救命士の資格を持つ者は、傷病者と最初に接触する立場にあります。それにも関わらず知識が不十分だと、判断を誤ることに繋がります。それは直接生命にかかわります。かの有名な宮本武蔵が「昨日の自分と今日の自分が同じである」といった趣旨のことを話していますが、学生たちには一つでも多く、命に関する知識を身に付けて、昨日より少しで

も進化した今日の自分でいなさいと伝えていきます。

それから、世界のひとと働くときに語学は道具になりますから、日本人が箸や茶碗を使うように、英語を使うようにならないといけないうと、授業では積極的に英語の教材も導入しています。

優秀な救急救命士を
一人でも多く輩出するために

学生たちには若いうちにいろいろなことを身に付けてほしいと思います。勉強はもちろんですが、せっかく体育系のトップレベル大学に入ったわけですから、良い友人たちと良い体の動かし方を一緒に学び、健康な体を一生保つ秘訣をこの学校で覚えてもらいたいものです。また、ここで良い友人に出会って、良い旅行をして、素晴らしい感性を育ててほしいと思っています。スポーツで救急医療を学ぶことで、得ることはたくさんあります。私は医者より剣道や柔道をやっているのが長いぐらいですから、それを実感します。学校案内のパンフレットにもあるように、体育・知育・徳育の3つがそろわないとバランスの優れた人間にはなりません。その意味で、最高の環境だと思います。

この4年間で、学生には国家資格である救急救命士の資格試験に合格できる力を付けてもらわなければならない。効率的に教えていくにはどうすればいいのかが、常に4年後を見据えて考えています。



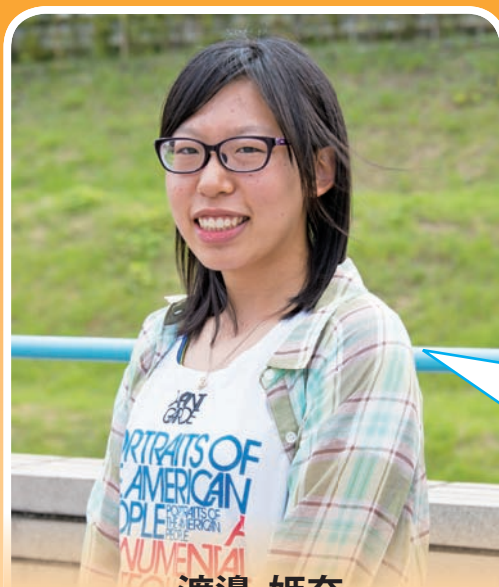
朝日 茂樹 教授
(救急医療学科)

■プロフィール／朝日 茂樹（あさひ しげき）
保健医療学部救急医療学科教授。1952年生まれ東京都文京区出身。弘前大学医学部卒業。博士（医学）（東京女子医科大学）。92年の中米ニカラグアの大地震で国際緊急援助隊として派遣されて以来、20年以上、途上国での災害緊急医療に携わってきた経歴を持つ。東日本大震災においても新幹線車内で救護活動を行う。「第42回医療功労賞」厚生労働大臣賞を受賞。中学2年生から取り組んでいる剣道は、七段の腕前。

頑張る保健医療学部一期生たち。

整復医療学科

高齢化が進む社会に対して
貢献していきたい



渡邊 姫奈

(整復医療学科 栃木県／県立宇都宮中央女子高校出身)

私は受験直前の昨年10月に日体大に保健医療学部ができたことを知りました。最初は国際英語関係の学部に進もうかと考えていましたが、整復医療学科のことを知り、興味を持ったのです。フェンシングをやっていた高校時代に、柔道整復師の先生や理学療法士の方にお世話になった経験があったので、私も柔道整復師や理学療法士になって、患者さんのケアやリハビリの力になりたいと思うようになりました。また、日体大には有名なトップアスリートが多く、その中で勉強ができれば色々な刺激が受けられると思い、進路を変えました。将来は地元(栃木県)で柔道整復師として働きたいと思っています。中学生のときに診てもらっていた柔道整復師の方には、柔道整復師になるための国家試験のアドバイスなど、けがを治すこと以外でもいろいろと相談にのっていただいています。私もけがの治療以外でも、患者さんをサポートできる人になりたいです。

けがも気持ちも
サポートできる柔道整復師に



若林 幸郁

(整復医療学科 東京都／上野学園高校出身)

スポーツを通して社会貢献できるような職業に就きたいと考えていたところ、保健医療学部という新しい学部が日体大にできることを学校案内のパンフレットで知りました。学校案内を読んでいく中で、整復医療学科に入学して、柔道整復師の資格を取れば、高齢化が著しい社会に対して貢献できると考えて受験しました。そして、勉強をしていくうちに、地方で接骨院などを開いてお年寄りの方をケアできるようになりたいと、将来の方向性が定まってきました。授業では包帯法の授業が楽しいです。最初はきれいに包帯を巻こうとし過ぎて、力が入り自然にできませんでしたが、次第にうまく巻けるようになってくると達成感があります。医療系の授業を受けているという実感が湧いてきました。今後はもっと実習の授業が増えていくので、楽しみです。日体大は先生との距離感も近いですし、トップアスリートも多いですから、刺激的な学校生活を送っています。

野外スポーツを実体験——

海浜実習や野外活動実習は、日体スピリットや社会貢献の精神を身につける本学の主要な行事。保健医療学部でも7月に「野外活動実習」が行われました。医療関係の学部で、体育・スポーツ教育と連携したプログラムを導入しているのも、本学ならではの特色と言えるでしょう。

本実習は、野外での自然体験と野外スポーツを通して、自然環境の偉大さ、危険性を理解し、そのうえでそれを安全に活用できること、さらに環境問題を意識した能力・態度を養うことを目的としています。また、集団生活を通して、仲間とのコミュニケーションを図り、自主性、協調性、社会性を身につけることも狙いです。こうした資質は、将来医療や救急救命に携わる者にとって不可欠であることは言うまでもありません。

実習では、水の事故から身を守るウォーターセーフティーや心肺蘇生の実習、スノーケリングなどを体験。スノーケリング、救急法・救助法などの外部指導員の方にも参加・協力いただきました。初めて本格的な実習に取り組み、命や健康に関わる仕事を目指す意識も高まったはず。保健医療学部の学生同士はもちろんこと、体育学部の学生との絆も深まり、貴重な経験になりました。



海外での救命活動など、
将来の夢が広がった



井上 英晃

(救急医療学科 東京都／国士館高校)

僕は東日本大震災をきっかけに、消防官や救急救命士の職業に就いて、社会の役に立つ人間になりたいと思うようになりました。その中で、昨年の6月、日体大に保健医療学科の救急医療学科ができるという情報を知り、オープンキャンパスに参加しました。そこで朝日茂樹教授の『災害医療に強い学部にしたい。学生でも災害の現場で活動できるような学科にしたい』という考えに共感して、日体大を受験しました。実際に入学して、授業は楽しく、中でも生化学と救急医学概論に特に興味をもっています。現在、救急救命士を目指す学生たちとサークルを作ろうと動いています。将来の夢は、最初は消防官一本で考えていましたが、海外での災害医療の話などを聞いて、海外で働きたいという気持ちも芽生えてきました。救急医療学科に入学して、社会や将来に対する視野が広がったと思います。まだまださまざまな方向性を検討中ですが、まずは救急救命士になることが大きな夢です。

人の役に
立ちたい
私に
マッチした
保健医療
学部



尾崎 あかね

(救急医療学科 神奈川県／県立弥栄高校出身)

中学生のときから日体大に行きたいという思いを強く持っており、親にも「日体大に入るんだ」とずっと言い続けてきました。その最初のきっかけは、小学生のときに日体大のダブルダッチサークルの方にダブルダッチを親切に教えてもらったことです。救急医療学科に入学した理由は、オープンキャンパスのパンフレットに、救急医療学科は人を助けたいという気持ちが強い人に向いていると書いてあったのを見たこと。私は人のために何かをしたいタイプで、それにマッチしていると思いました。また、救急医療学科のカリキュラムにも興味を持ちました。体の構造が分かる解剖学や生化学など、高校時代よりさらに専門的に学ぶことができ、楽しい授業ばかりです。将来について、入学当初は救急救命士の資格を取って病院に勤めたいと思っていましたが、勉強する中で、さまざまな選択肢を考えるようになりました。災害医療の分野も興味深いですし、卒業までにじっくりと考えたいと思います。

自然の中で、救助法や



保健医療学部 野外活動実習

日程

第1回：平成26年7月12日(土)～15日(火)

第2回：平成26年7月16日(水)～19日(土)

実習地 西伊豆(静岡県)



学へ。受験生の期待に応える入試制度がさらに充実。

平成27年度学生募集、始まる

平成26年度入試を終え、本学は3年連続で志願者増を達成した。スポーツ、健康あるいは身体、生命などをキーワードに社会の要請に応え、児童スポーツ教育学部、保健医療学部を開設。

全学的な教育環境の整備、推進の成果と言える。平成27年度入試では、これまでの入試制度の改善をもとに様々な強みを持つ入学希望者に更なる力を発揮してもらえよう、その体制を整える。荻 浩三アドミッションセンター長に、平成27年度入学試験のねらいと概要を聞いた。

3学部7学科体制で捉える学問の射程もさらに拡大・深化

26年度入試では、志願者数が前年度比10.2%となりました。18才人口の5%減少を考えれば、堅調な数字ではないかと考えます。特に、開設2年目の児童スポーツ教育学部は志願者が倍増となりました。初年度は、告知が遅れたハンデもあり、受験生の獲得が思うようにはいきませんでした。また、身体を動かすことを実感できる結果となりました。また、身体を動かすことに主眼を置いた児童教育学・保育学という本学独自の視点が、潜在的にあった受験者層を掘り起こしたのではないかと推察しています。

トップアスリートを中心とした体育大学というイメージだけでなく、スポーツの実践を通じて全ての人々に生命(いのち)の輝きを届けることができるような人材を、体育学部、児童スポーツ教育学部、保健医療学部においてそれぞれ創出してくれることを期待したいと思っています。

入試制度の更なる拡充で、受験生のさまざまなニーズに応えたい

平成27年度の入試は、受験機会の拡充に努めてきた昨年度までの方針を、さらに推進していきます。ひとつは、横浜・健志台キャンパスでの受験に加え、全国5大都市(札幌、仙台、名古屋、大阪、福岡)をサテライト会場として試験(学科A入試一次選考及び一般入試前期・全学統一日程のみ)を実施します。いわゆる地方入試の実施は、全国から本学への入学希望者を改めて掘り起こすとともに、受験に係る経済的負担の軽減を目指しました。また、目的意識や将来のビジョンが明確な受験生に対して、



荻 浩三
アドミッションセンター長

志望学科・コースへの受験機会をより多く確保するため、2月実施の一般入試前期を「全学統一日程」と「学部個別日程」とに分けることとしました。これにより、体育、児童スポーツ教育、保健医療の3学部で、それぞれ受験のチャンスが複数回設定できました。

入学者の割合は従前通り、優れたスポーツ実績を有する者1/3(トップアスリートA入試・スポーツ推薦入試)、充実した高校生活を送った者1/3(学科A入試・地域ブロックA入試・一般指定校推薦入試等)、基礎学力及び基礎運動能力を強みとする者1/3(一般人入試)を堅持し、多様な人材を誘います。

一方で本学の使命のひとつでもあるトップアスリートの受入れにこれまで以上に取り組んでいきます。2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、体育学部で実施するトップアスリートA入試について募集人員と受験機会を拡大します。I期(70名・9月実施)とII期(10名・3月実施)に分け、世界で活躍するアスリートを一層迎え入れたいと考えています。

大きな夢をもった学生たちが切磋琢磨するキャンパスをめざして

平成24年度入試より個性豊かな学生の確保を目指して、様々な入試制度の導入を積極的に進めてきました。これまで受験機会の拡大を図ることに主眼を置いてきましたが、一方で選考方法においてもより客観的な尺度を用いて多彩な能力・資質を評価できるよう、昨年度のA入試では新たに「総合審査」を導入しました。

これは、提示されたデータを考察、それぞれの設問に対し、自身の主張を論述するもので、文章構成力や表現力はもとより、当該のデータを分析する力(理解力)を併せて求めています。なか

でも、それぞれの課題(スポーツ、健康、身体、生命など)に対する受験生の現代認識(現代社会を読み解く力)が最も問われる内容となっています。

また体育学部一般入試前期(学部個別日程)では、筆記試験と実技試験の点数配分を2:1(昨年度入試より)とし、基礎学力にウェイトを置いています。さらに学力試験のみで選抜する入試区分、一般入試前期(全学統一日程)と一般入試後期を設けて、必ずしも実技力に秀でていなくても、スポーツが大好きで知的好奇心の旺盛な、例えば、大学院に進学しスポーツ科学の研究者を目指してみようといった意欲のある受験生に広げていきたいと考えています。

これまで日体大は、トップアスリートばかりが集う大学だと多くの受験生に誤解されてきました。加えて、将来の進路も中・高等学校の保健体育教諭に限定されているように映っていたことも確かです。「スポーツの裾がりは競技や競争という枠に留まらず、我々人間の毎日の生活を豊かにしてくれる無限の可能性を秘めたもの」という立場から様々な「個」(強み)を有する優れた人材が交叉するキャンパスを目指していきたいと思っています。学生がそれぞれの特徴(違い)を理解し、成長し続けられる教育環境がこの日体大には整備されていることを多くの受験生に伝えていきたいと考えています。

「人ひとりにとって『かけがえのない4年間』となるために

本学を目指す受験生に伝えたいことは、スポーツが大好きであって欲しいということです。加えて、「日体大で何を学び、将来どんな場所に立ちたいと考えているのか」という目的意識が明確であれば、さらに充実した学生生活が過ごせるはずです。スポーツという特色をもつ本学だからこそ学べることであります。

一流のアスリートや指導者がいる中に身を置くことでしかできない経験や発見は、皆さんの大きな強みとなることでしょう。これまでのような保健体育教諭に限らず、小学校・幼稚園教諭、保育士、柔道整復師、救急救命士など卒業後の進路選択にも幅が広がりました。加えて近年では、福祉の現場やスポーツに関わる行政機関等で活躍する人材の輩出も顕著であり、本学卒業生の存在感は一層増すばかりです。

大学での4年間は、一人前の社会人となるための準備、ウォーミングアップの期間といえるのではないのでしょうか。充実したトレーニングをしたアスリートこそ、実践の場面で好成績を残すことができます。日体大での学生生活が、それぞれの人生において実り多き成長の場となるためにも、我々教職員は常に学生と向かい合っていかなければいけないと考えます。

平成27年度入試の ここが新しい!

平成27年度入試の
おもな変更点を紹介します。

スポーツを基軸にいっそう拓かれた大

ここが新しい! 全国5大都市(サテライト会場)での入試を導入

日本全国のアスリート、スポーツ好き、来たれ日体大へ! 横浜・健志台キャンパスに加えて全国主要都市(サテライト会場)での入試を実施し、受験生の皆さんの便宜を図ります。

●サテライト会場にて実施する入試(選考)

・学科AO入試(体育学部・児童スポーツ教育学部・保健医療学部)

※2次選考は横浜・健志台キャンパス

・一般入試前期<全学統一日程>(体育学部・児童スポーツ教育学部・保健医療学部)

●実施する都市

札幌・仙台・名古屋・大阪・福岡

※サテライト会場の詳細は平成27年度学生募集要項(入学願書)参照

ここが新しい! 一般入試前期(全学統一日程)を新設

●一般入試はこうなる!

一般入試前期において、「全学統一日程」と「学部個別日程」を設定。受験機会が拡大します。

チャンスは
3回!!

一般入試前期

全学統一日程

<基礎学力を評価>

体育学部、児童スポーツ教育学部

筆記

<基礎学力+適性(人物)を評価>

保健医療学部

筆記 + 面接

一般入試前期

学部個別日程

<基礎学力+基礎運動能力を評価>

体育学部

筆記 + 実技

<基礎学力を評価>

児童スポーツ教育学部

筆記

<基礎学力+適性(人物)を評価>

保健医療学部

筆記 + 面接

一般入試後期

<基礎学力を評価>

体育学部、児童スポーツ教育学部

筆記

<基礎学力+適性(人物)を評価>

保健医療学部

筆記 + 面接

ここが新しい! トップアスリートAO入試(体育学部)が2回に

トップアスリートに受験のチャンスを広げます。

●トップアスリートAO入試(体育学部)の変更点

・実施回数: 1回→2回(秋季11月・春期3月に実施)

・募集人員: 60名→80名(I期70名・II期10名)

・対象競技種目: 35種目→40種目

(「ライフセービング」「新体操(女子のみ)」「スカッシュ」「セパタクロー」「チアリーダー」を追加)

受験機会がさらに拡大!
あなたにオススメの
受験方法は?

●AO入試+推薦入試+一般入試でさらにチャンスが広がります。

○スポーツの実績を評価

体育学部

①トップアスリートAO入試(I期・II期)

②推薦入試(I期・II期)スポーツ推薦

※推薦入試はI期またはII期のどちらかの出願に限る

○学校生活の充実や熱意を評価

体育学部 児童スポーツ教育学部 保健医療学部

①学科AO入試

②推薦入試 一般推薦

③地域ブロックAO入試 ※体育学部のみ

一般入試

体育学部 児童スポーツ教育学部

保健医療学部

①一般入試前期 全学統一日程

②一般入試前期 学部個別日程

③一般入試後期

オープンキャンパス

オープンキャンパス日程(10:30~15:00 予約不要 入退場自由)

9/21(日)

[横浜・健志台キャンパス]

12/7(日)

[東京・世田谷キャンパス]

★大学案内に関する問合せ 東京・世田谷キャンパス 広報課 03-5706-0948(直通)

★入学試験に関する問合せ 横浜・健志台キャンパス アドミッションセンター 045-963-7955(直通)



データの本質を知り、体育・スポーツの最前線で活かしていく。 スポーツと科学の融合をめざす。

<体育科学研究科 博士前・後期課程 トレーニング科学系、博士後期課程 教育・コーチング学系>

競技力を向上させるためにはどうすればいいか。測定技術が進みさまざまなデータの収集が可能になったが、それだけにデータを読み解く能力、さらにそれをトレーニングや指導に展開していく能力がますます重要になっている。科学と現場の架け橋となるべく、実践研究に取り組む西山哲成教授に、研究の意義や現状の課題について話を聞いた。

スポーツと科学の融合により パフォーマンス向上を目指す

—現在の研究テーマに着眼した経緯を教えてください。

私は日体大で大学院まで進み、スポーツバイオメカニクスや運動生理学などを学びました。その後縁があつて他大学の医学部で助手として働く機会を得ました。8年ほど体育とは関係のない、生理学の世界を学びましたが、生理学を身近に学ぶことができたのは、いまの糧になっています。

もともと、指導現場で世界の頂点に立つための人材育成がしたいという思いがあり、教員として日体大着任後は競技力向上のサポート科学にしばらく取り組んでいました。科学と現場の融合ということは常に言われてきたことですが、各運動種目をサポートする中で日体大のS&S（スポーツ&サイエンスの融合）にはまだまだ「伸びしろ」が多いと実感しました。それならば、これを中心テーマにしたいと考え、日体大の自転車競技部の部長と監督を務めながらの研究に注力するようになったわけです。例えばエルゴメーターを使って体力測定する、エネルギー効率を調べる、脚筋活動の調和など、スポーツ科学の研究において自転車というツールは多く使われますから、指導者の立場は実践研究を進めるには最適な環境です。日体大だからこそ、かなえられる研究環境であると思っていますし、現場で活かすためのこの実践研究を大学側からも評価・応援していただき感謝しています。

います。

自転車競技部の監督として6年前にチーム指導を始めた当時は選手たちの技量もまだまだでしたが、強くなるために思いつくかぎりの科学的アプローチを使い指導をしたところ、ようやく昨年度に代表選手を3人輩出することができました。上級生の3、4年生になってからの代表デビューです。競技成績は毎年着実に向上していますし、中には大学院に進む学生も出ています。

—先生の研究テーマについて教えてください。

研究のテーマはスポーツと科学の融合です。スポーツ科学がいかにパフォーマンスの向上に寄与するかを研究しています。具体的には、持久力、力の流れ、身体組成体の成分、動作分析、心理、栄養学など、ベーシックな測定項目を基に実践に活かす取り組みと言えます。

科学データ活用の実例として、初めて日本代表になった選手のケースをご紹介します。1年から4年次までの間に、3,000mタイムトライアルのタイムが関係者の間でも驚くほど激的に伸び続けた選手です。高校生の平均レベルからスタートした1年次は、試合ごとにベストタイムを出し続けて、オフシーズン後の2年次も継続してタイムが向上しました。2年間のレベルアップの大きさが目立ち、3年次には日本自転車競技連盟の強化育成選手となりました。減量などを経てさらにレベルアップさせようとした。

その後のパフォーマンスがさらに代表チームに認められるために必要だとプレッシャーがかかるようになる」と記録が伸び悩みました。これらの記録の停滞を見て、私たちコーチングスタッフや心理学の先生、そして選手自身も、メンタルストレスが影響しているだろうと考え対策を講じようとしていました。その後、結局はナショナルチームを外れ、プレッシャーのない状態でオフ期のトレーニングを過ごした翌シーズンには、学生日本記録を出し、次は日本記録をと口言できるほど、また記録が上がりてきました。

その学生にマスクを付けて、酸素をどれほど取り込む能力があるか、持久力を測るテストを実施しました。すると、呼吸循環能力からみた持久力（最大酸素摂取量）は上がっていました。不思議な話です。記録が伸び悩んだ理由はやはりメンタルだったのか、。ただ、その学生が1年次から続けて測定してきた他の生理学および体格データを分析し直していくと、記録が伸び悩んだのは違う理由だと分かったのです。

—具体的に、スポーツと科学の融合とは？

きつい運動をすると、乳酸が溜まって脚がパンパンになるでしょう。乳酸が溜まった状態でも頑張れる能力、それを「耐乳酸能力」と言いますが、彼女の伸び悩んだ時期とその数値が下がった時期が一致していました。

当時は、更なるレベルアップを目指して減量にも取り組み始めていました。筋量が低下すると「余裕力」がなくなるので、同じ力を出していても、乳酸が出やすい、また乳酸が出たときに耐え切れないということが起きます。減量したことで筋量が低下し、そのことで乳酸に耐える能力を失ったことが、記録を落とした原因の一つと考えられました。

生理学的な側面からパフォーマンス低下の原因を捉えるべきでした。データを継続して収集するところのようなことが明らかになるというのは研究のセオリーですが、なかなかそこまでいいにデータ収集や分析が行われていないのが現実です。そこに、スポーツと科学の融合という研究が挑むべき課題が残



PROFILE

西山哲成 教授

体育学部体育学科教授。1965年生まれ、埼玉県出身。日本体育大学体育科学研究科・体育学専攻修士課程修了。医学博士（生理学）（愛知医科大学）。大学院ではトレーニング科学系（前期・後期課程）および、教育・コーチング科学系（後期課程）を担当している。そのほか日本ハンドボール協会スポーツ・医学委員、日本スケート連盟強化委員（医・科学）などを歴任。

体育科学を リードする

～大学院・研究科の取り組み～

4

されています。生きたデータの積み重ねが実践研究の成功確率を高めるのです。科学データが高確率でパフォーマンスを向上させることに活かされるための実践研究をしています。

自転車競技のトレーニングに 後ろ向きのハイハイを導入

—そのほかの研究事例を紹介してください。

スピードスケート選手が自転車競技を始める、すぐに頭角を現すことがあります。スピードスケート選手のトレーニング方法や体力特性を研究することで、自転車競技選手のトレーニングに活かすことができます。骨盤、股関節周りを重点的にトレーニングして、この要素を上げるとパフォーマンスが向上すると科学データで明確にされています。

コーディネーション(体をいかにコントロールして自分の意図するパフォーマンスを発揮するか)能力を高めることが重要です。8、9年前に始めた幼児の運動能力の研究の成果である後ろ向きのハイハイを、自転車競技のトレーニングに取り入れています。私はスピードスケートのサポートをしていた傍ら、神奈川県教育委員会との共同研究で、1万人を越える幼児の運動能力を調べました。そこで私は全身のコーディネーション力を表す指標として、後方ハイハイを考案しました。5mのタイムトライアルの中で、いかに四肢を素早く動かして体重を移動させるか。それが全身のコーディネーション力を表すのではないかと提案したのです。この研究で学位を取得している大石健二氏(現・日本体育大学准教授)がさらに分析をして、後方ハイハイのタイムが速い人は、四肢を動かすタイミングが左右均等で、腕と脚のリズムも均等。そして、均等性が高い人ほど重心の横揺れも小さくてタイムが速いことなどが、動作分析から分かりました。

そのほか、画期的にうまくいったと思える試みが「パワークリン」というウエイトリフティングの動作をトレーニングに取り入れたことです。例えば、昨

年の秋に日本代表になった選手は、平凡な選手でしたが、このトレーニングを取り入れたことで、アジア選手権で優勝するなど、爆発的なジャンプアップを果たしました。彼女は体幹が極端に弱く、自転車競技における力の連結が悪かったので、パワー、力の伝達の効率を良くするために筋パワーの向上とともにコーディネーション能力を高めるようなトレーニングを取り入れたわけです。この選手のケースではウエイトトレーニングの専門家である本学トレーニングセンター指導員の永友憲治さんに協力いただきました。まさに科学とスポーツ実践の融合の結果だと思っています。

スポーツの現場と科学が さらなる融合を果たすために

—アスリートだけでなく広く一般にも活用できる研究ですね。

幼児の運動能力に関して、3年間続けて大学近隣の5つぐらの保育園に赴き調べたことがあります。子供の運動能力が低下し続けているとずっと懸念されてきました。そのため、「現場はどうなっているんだ?」と注目され、幼児の運動能力を測定する研究が盛んに行われたのです。そのころに、私が年2回運動能力測定をしていた園では、関わりはじめて1年以内に園全体の運動能力の平均値が、過去最高の1980年代ピーク時のレベルを超えました。幼児の運動能力の向上について、園の先生たちに働きかけをして、興味を持ってもらった結果、遊びや動きの質が変わったのです。1週間の保育園の運動プログラムは一切変えず、自由に運動できる時間帯も一緒。先生たちが教育する時間帯と同じ、インストラクターを増員したわけではないにもかかわらずです。では何が変わったかというと、運動の強さが変わったのです。運動能力を高めるための要素は、運動強度と時間と頻度であり、そのどれかを適切に修正する必要があります。特にそのうちの何が足りないのか、私たちは運動強度だと目を付けて先生たちに働

きかけた結果、何らプログラムを変えずとも簡単に1年でかなりのジャンプアップをみる事ができました。例えばドッジボールなら、思い切って投げたり、全力でボールをストップするような状況を作ったり、運動能力が下がったと批判するのはなく、要素を押さえてそれを大事に教育すれば、同じ時間の使い方でも激的に変わるのです。それは自転車競技でも同じです。

—私たちは何を意識して学んでいったらいいでしょう?

スポーツと科学の融合を進めるためには、現場にデータを読める人間が必要です。起こっている現象を読む、客観的と言われているデータが本当に現場で通用するものなのかを読める、そういう能力が大切だと思います。いま大学院で研究している学生は、スイッチを押せば、いとも簡単に測定ができる計器を使うことが当たり前になっています。意味が分からなくても簡単に大量のデータを手にすることが出来ます。そのデータが正確に測定されているのか、どんな原理に基づくものなのか、どのような仕組みで何が起こっているのか、を知らない(知ろうとしない)と、本質を見抜けないでしょう。そういうベーシックな観点が重要です。現場に出して使えるデータかどうか、特に院生はそういう判断ができる能力を身につける必要があると思います。

私は医学部在籍時に、宇宙飛行士の候補者が研究室に出入りして科学と向き合う姿を日常的に見てきました。科学を現場で使う大切さを、そういう場面でも学んだと思います。

科学と現場のスポーツをつなげる役割はこれからもっとそう求められていきます。現場の選手と汗を流しながら研究に取り組むことができる、スポーツと科学の融合というテーマはまさに日体らしい研究と言えるのではないのでしょうか。多くの学生が大学院の門をたたき、現場との架け橋となってくれることを期待します。



平成26年度〔上半期クラブの主な大会成績〕

学生支援センター 生活支援部門 調べ 4月～6月

クラブ名	大会名	種目	順位	氏名
■バレーボール部女子(6人制)	2014年度春季関東大学女子1部バレーボールリーグ戦		2位	
■自転車競技部	第83回全日本自転車競技選手権大会トラックレース	女子エリート 3km個人/パシュート	3位	中村妃智(4)
		女子エリート ポイントレース(20km)	3位	中村妃智(4)
	第16回全日本学生選手権クリテリウム大会	総合	1位・3位	中村妃智(4)・齋藤望(2)
	第54回 東日本学生選手権トラック自転車競技大会	女子 3km個人/パシュート	1位・2位	中村妃智(4)・齋藤望(2)
		女子500mタイムトライアル	1位・3位	齋藤望(2)・中村妃智(4)
		女子チームスプリント	2位	中村妃智(4)・齋藤望(2)
		男子 1kmタイムトライアル	3位	山内厚二(4)
	第34回アジア選手権大会トラックレース	女子エリートポイントレース(20km)	1位	中村妃智(4)
	第34回アジア自転車競技選手権大会・ロードレース	女子ジュニアロードレース(78.5km)	3位	坂口聖香(1)
■アーチェリー部	第25回全日本学生アーチェリー東日本大会		1位・2位・3位	西野汐梨(2)・中村美樹(4)・小城碧(1)
■陸上競技部	第93回関東学生陸上競技対抗選手権大会	男子1500m	3位	加藤光(4)
		男子 4×400mR	2位	桑島拓郎(4)・瀬野貴志(3)・清水勇也(3)・田口雄大(4)
		男子棒高跳	1位	山本智貴(4)
		女子200m	3位	長谷川美里(4)
		女子100mH	2位	福部真子(1)
		4×400mR	1位	中田愛理(3)・白永優美子(2)・北村夢(1)・長谷川美里(4)
		女子棒高跳	2位・3位	福島沙和子(3)・小山智子(3)
		女子七種競技	3位	中村茜(4)
	第16回アジアジュニア陸上競技選手権大会	女子100mH	1位	福部真子(1)
■少林寺拳法部	第51回関東学生少林寺拳法大会	男子二段以上の部	1位	内山田俊太(3)・山岡健太郎(3)
		男子初段の部	1位	勝田将揮(2)・鈴木康平(1)
		女子二段以上の部	3位	林恵理子(4)・畔蒜みく(3)
		男女二段以上の部	3位	野井加奈子(4)・柳田佳祐(2)
		団体演武 男子団体	1位	羽生智彦(3)・伊藤颯馬(1)・中村祥樹(4)・江間信哉(3)・今成健仁(2)・田才隼人(2)・川島奈央(1)
		三人掛けの部	3位	青木拓磨(3)・白椿有弥(3)・下山祥来(2)
■混合バレーボール同好会	第13回関東混合バレーボール選手権大会	A大会・AA大会	優勝	
■ラクロス部男子	あすなるカップ		2位	
■フェンシング部	第10回剛騎杯フェンシング選手権	女子サーブル	3位	小藤敦海(2)
	東京都シニアフェンシング選手権大会	女子エペ	3位	大迫夏奈(3)
	第67回関東学生リーグ戦	男子サーブル2部	3位	
		女子エペ1部	3位	
		女子サーブル2部	2位	
	第2回サーブルランキングマッチ	男子サーブル	2位	芹澤洋人(2)
■軟式野球部男子	東都大学軟式野球連盟 春季リーグ戦		1位	
■軟式野球部女子	全国女子軟式野球選抜交流碧南大会		2位	
■ライフセービング部	第5回全日本学生ライフセービングプール競技選手権大会	200mスーパーライフセーバー	1位・3位	坂本陸(3)・江部愛理菜(4)
		100mレスキューメドレー	2位	寺坂恵美(2)
		100mマネキンキャリー・ウィズフィン	2位	寺坂恵美(2)
		100mマネキンキャリートゥ・ウィズフィン	2位・3位	坂本佳風子(2)・渡邊来美(4)
		50mマネキンキャリー	1位・3位	坂本佳風子(2)・坂本陸(3)
	第27回全日本ライフセービングプール競技選手権大会	50mマネキンキャリー	1位	坂本佳風子(2)
		100mレスキューメドレー	2位	坂本陸(3)
		200mスーパーライフセーバー	2位	坂本陸(3)
		200m障害物リレー	2位	江部愛理菜(4)・小林愛菜(4)・井熊理子(2)・坂本佳風子(2)
		4×50mメドレーリレー	1位	江部愛理菜(4)・小林愛菜(4)・佐藤亜那(4)・渡邊来美(4)
	第27回全日本種目別選手権大会	ビーチスプリント	2位・2位	石井雄大(4)・長野文音(2)
		2kmビーチラン	2位・3位	河上尚輝(1)・山田美月(3)
		サーフレース	1位	坂本陸(3)
■フィンスイミングクラブ	第26回フィンスイミング日本選手大会	女子総合	3位	
		女子4×100mビーフィンリレー	1位	莊加真歩(4)・松田知華(2)・藤田聡子(2)・室井真純(2)
		男子4×100mビーフィンリレー	3位	吉田拓(1)・安藤 一樹(3)・高橋勇樹(4)・宮島陸徳(2)
		女子200mCMASビーフィン	2位	室井真純(2)
		女子4×200mサーフィスリレー	2位	浜田未来(1)・小野裕美(1)・中田瑞紀(2)・中村彩希(4)
		女子400mビーフィン	1位・3位	室井真純(2)・松田知華(2)
		女子4×100mサーフィスリレー	3位	中村彩希(4)・小野裕美(1)・中田瑞紀(2)・浜田未来(1)
■トランボリン競技部	第47回東日本学生トランボリン競技選手権大会	個人男子Aクラス	2位・3位	藤田隆之介(1)・池野友崇(2)
		個人女子Aクラス	1位・2位	服部佳奈(2)・佐竹玲奈(2)
		シンクロナイズド男子Aクラス	1位	池野友崇(2)・藤田隆之介(1)
		シンクロナイズド女子Aクラス	1位・2位・3位	【富田ひとみ(2)・服部佳奈(2)】・【佐竹玲奈(2)・土井畑知里(2)】・【森田千尋(4)・小久保美伶(2)】
■エアロビクス同好会	スポーツエアロビック2014埼玉オープン	シニア女子シングル部門	1位	本庄彩香(4)
■ハンドボール部女子	春季リーグ		3位	
■アルティメット・チーム	第19回東日本アルティメットフレッシュマンズカップ	オープン部門予選	9位	
		ウィメン部門	1位	
	2014CLUB Jr. Invitational Ultimate Tournament	ウィメン部門	4位	
	2014菅平ミックスアルティメット選手権大会	ウィメン部門	5位	
	第10回東日本アルティメットジュニアカップ	オープン部門	8位	
		ウィメン部門	1位	
■インラインホッケークラブ	第15回NARCh日本予選仙台大会	女子	ベスト4	
	第17回関東インラインホッケー選手権大会	男子・女子	3位・4位	



()内は学年

TOPICS

ウォームアップセミナーを実施しました

今年度4月から本学では、「日本体育大学社会貢献推進機構」を設置して、体育・スポーツを通じた社会貢献活動を積極的に展開することといたしました。

そこで、6月18日(水)両キャンパスにおいて、これらの社会貢献活動の主たる担い手となる教職員および学生を対象として「ウォームアップセミナー」を実施いたしました。このウォームアップセミナーでは、他大学の実践例の紹介や、本学が目指す社会貢献活動の目標や目的、ならびに今後の計画を参加者に紹介することで、本学における社会貢献活動の気運を醸成することを目的としたものです。

今後、スポーツ基本計画に記された基本方針のキーワードである「する」、「観る」、「支える(育てる)」の3つの視点から、「公開講座」や「スポーツ教室」、「指導者講習会等」、「学校や施設におけるボランティア」、「発表会」等を積極的に展開していきます。



TOPICS

文部科学省「スポーツ・アカデミー形成支援事業」の委託先大学に採択されました

日本体育大学は、文部科学省が2020年オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた国際貢献策としての「スポーツ・フォー・トゥモロー」プログラムの一環として、平成26年度から実施する「スポーツ・アカデミー形成支援事業」の委託先大学として採択されました。

この事業は、オリンピズムの普及とスポーツ医科学研究の推進を図るため、国際オリンピック委員会(IOC)関係者など国際的なスポーツ関係者の招聘、次世代の国際スポーツ界の核となる人材の受け入れ・養成を推進するための国際的な中核拠点を、我が国の体育・スポーツ系大学群と各国の体育・スポーツ系大学間でのネットワークにより構築することを目的とするものです。

日本体育大学における事業全体の概要については、本学のHPをご覧ください。

TOPICS

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた連携協定締結式に出席

平成26年6月23日、東京オリンピック・パラリンピック競技大会の成功に向け、一般財団法人 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会(TOKYO2020)と全国の大学が連携し、オリンピック教育の推進や人材育成などを進めるための連携協定が締結されました。本学からは谷釜了正学長をはじめ、大学アスリートを代表して森田淳悟教授(バレーボール メキシコ五輪 銀メダル、ミュンヘン五輪 金メダル)、青柳徹准教授(スピードスケート 五輪4大会出場)、田中理恵助教(体操競技 ロンドン五輪出場)、高木美帆(スピードスケート バンクーバー出場)が出席しました。

今後の大学に求められる役割として、オリンピックの歴史や大会の意義を学ぶ講座を開設することによって、真の意味でのオリンピックの価値を教え、スポーツだけでなく、文化・芸術面での交流によって異文化の考え方を知るきっかけをつくることや、ボランティアの育成やアスリートの輩出、また大学のスポーツ施設を外国選手団の事前合宿や練習などへの提供が想定されています。



TOPICS

チェコ共和国・国立パラツキー大学代表团による大学説明会を開催

平成26年1月20日、本学体育学部が、チェコ共和国のオロモウツ市にある国立パラツキー大学 体育科学学部と、学術・スポーツ交流協定を締結したことを受け、5月13~14日、3名の代表团が本学を訪問され、パラツキー大学の紹介講演会を開催いたしました。

大学紹介のビデオやプレゼンテーション資料を見ながら、チェコ共和国やオロモウツ市およびパラツキー大学の歴史をはじめ、体育科学学部に関する説明や、可能な学習活動などをご紹介いただきました。

パラツキー大学には、柔道や剣道といった日本武道を学ぶ学生もあり、平成26年9月の後学期からは、第1号となる交換留学生を受入れる準備が進んでいます。

本学は、2020年東京オリンピックの開催を目途に、今後も積極的に世界の交流校との学術・スポーツ交流を発展させていく予定です。



TOPICS

学校法人日本体育大学と学校法人名城大学が包括連携協定を締結

日本体育大学と名城大学が学校法人同士の立場から包括連携協定を締結し、6月20日、名城大学天白キャンパス本部で日本体育大学の松浪健一郎理事長と名城大学の小笠原日出男理事長が記者会見に臨みそれぞれ協定提携の意義について述べました。

両大学間では、競合する学部がないため異分野からのアプローチ、学際的な連携が期待され、高校間でも教諭・生徒間の交流による活性化なども期待されます。東京と名古屋に本部を置き、大学を有する学校法人間の包括連携協定締結は初のケースです。具体的な取り組みについては、今後、両法人の代表者で構成される連携推進協議会が設置され、協議を開始していくことになります。



国際交流センターがスタート！

国際交流センターとは？

日体大国際交流センターは平成26年度に新設された新しい部署です。「選手強化」、「国際化」、「ワンファミリー」を踏まえ、国際交流の推進を積極的に実施し、国際化・グローバル化社会で活躍できる人材の育成が本センターのミッションです。

- 1 JICAボランティア（以下JICA）と本学との連携を強化する覚書を平成26年7月8日に交わしました。今後はこの覚書を踏まえ、更なるJICAへの派遣促進を強化していきます。

昨年度実績

●短期ボランティア派遣（1ヶ月）

カンボジア8名 モルディブ3名 モロッコ3名 ブラジル14名
計28名

●長期ボランティア派遣（2ヶ年）

ブルキナファソ・モンゴル・モルディブ・セネガル・ブラジル
ニカラグア・ザンビア・ネパール・エチオピア・パラグアイ
計10名

- 2 学術交流（交換留学制度、海外研究への派遣協力、協定締結校への教員情報の紹介と依頼等）

現在、本学が交流協定を結んでいる大学は

- ① 北京体育大学（中国）
- ② ドイツスポーツ大学ケルン（ドイツ）
- ③ 慶熙大学校（韓国）
- ④ モンゴル国立体育大学（モンゴル）
- ⑤ パラツキー大学（チェコ）
- ⑥ 龍仁大学校（韓国）
- ⑦ 上海体育学院（中国）

平成26年度内に更に2大学と交流協定締結を予定しています。

- ① 国立韓国体育大学（韓国）
- ② カンピーナス大学（ブラジル）

- 3 留学生の派遣と受入（短期派遣も考慮）

- 4 大学クラブの国際交流促進援助



国際交流センター員（写真左から）黒木豪 センター員、立野宏幸 事務長、荒木達雄 センター長、石井隆憲 副センター長、黒澤和歌子 センター員

- 5 留学生の活動のサポート及びJICAボランティア希望学生への語学学習支援プログラムの提供。

現在、本学に受入中の学生数は10名です。今年度の6月には、留学生の交流会を設置校も含め開催しました。今後は、更に規模を拡大したいと考えております。そして、JICA ボランティア参加希望者の皆さんに後学期からTOEIC 対策プログラムを実施します。

- 6 交換留学についての相談、海外派遣事業（JICA）の紹介等

- 7 交流協定締結校の教員交流（派遣と受入）

- 8 交流協定締結校の増加。全学科の学生を対象とした、学術・スポーツ交流協定締結校の増加を推進します。

スポーツを通じて国際化社会に対応できる人材を育成し、オリンピックムーブメントに先駆ける日体大を目指します。